

高雄日本人学校の風

校長 高口 和治

保護者の学校評価の記述のところで、私がすぐに答えるべきものもありました。「以前校長先生は学校内の中国語の会話をほぼ禁止されていたようですが、今は、そういうのはないのでしょくか」という質問がありました。「以前校長」が私の事であれば、それはお話をしたことはありません。ただ、授業は、中国語以外の授業は日本人学校では、文部科学省から認可されている学校ですので、日本語で授業をしています。いろんな場面でお話をしていますが、1, 2年生が休み時間に中国語を使っていたとしても、その子は、まだ、中国語が優位なのです。高学年になって、中国語が優位なお子さんは一人もいません。担任は、日本語に慣れるために、休み時間も日本語で話すように働きかけています。

私達は、はやく日本語が優位になるように取り組んでいます。

また、お迎えや安全の問題は、中正の保護者が車を乗り入れていないのに私達だけ乗り入れられるか、職員の打ち合わせが確保出来ない現状等大きな影響を与えていることですので、学校運営委員会やPTA役員会にも相談して、よき解決方法を探ります。

9月29日（月）

上越教育大の5人の先生方が視察にきて、瑞祥高校と高雄師範附属中の授業を見に行きました。印象深かったのは、附属中では情報教育でプログラミングをやっていました。

9月30日（火）

中正小学校と福東小学校の授業をみてきました。中正の授業は小2で詩を扱ってました。2年生は、私が覚えていない漢字も知っていてすごい。（あとで、30代の台湾人にこんな授業をしていたといたら、その詩をそらんじていました。）情報の授業も4年生のダンスクラスでプログラミングの授業でした。福東の英語は、3年生で、初期のことをやっていました。情報の授業は、5年生でしたが、写真の加工の仕方をやっていました。

この2日間で、台湾と日本の学校の授業の考え方の違いがさらにはっきりしてきました。上越教育大の先生も、もちろん日本の方ですので、比較をしてみました。

簡単に言えば、日本では子どもに考えさせる。間を大事にする。声のトーンにも気を配る。台湾では、教師が説明して子どもが理解するです。どちらがいいとは、国の方針で違います。特に、私は、効率の問題もあり、先生方に「必要なことは与えて、その上で考えさせ

よ」といい続けています。

10月1日（水）

移転の際に大事にしたことの一つに、日本と遜色のない、情報教育をするということがありました。現実には、コンピュータの不具合やネット整備がどうもうまくいかず、思ったようにはできていません。それでも、各教室にテレビが入っています。テレビと言っても、コンピュータとつなげることができます。また、1階、3階、4階には、画面上で、子どもも操作ができる「BIG PAD」が一台ずつ用意してあります。

1時間目：大石先生が、理科で授業をしました。「BIG PAD」で、「つりあっている力」と「作用・反作用の2力」を理解させようとしていました。中3の子どもは討論もかなりできます。グループで話し合っ、画面上で操作して、それをまた話し合っていました。大石先生は、画面上に記録されている子どもの書いたものを戻して、誰々はこちら書いていたね、と討論に使っていました。

2時間目：吉原先生が、算数で授業をしました。「鎌倉の大仏が歩いて奈良の大仏に会いに行った」という想定で、短時間に必要な情報を「BIG PAD」を使って提示していました。算数的には、拡大図と縮図の復習になります。また、担任の願いとしては、台湾にいて、日本に行ったときに、日本的な大仏にも触れてもらいたいという2重の学習がありました。

3時間目：中村先生が、体育で授業をしました。「BIG PAD」で、前の時間にとった跳び箱での前転を、踏切や着手に着目できるように再生していました。ポイントで画像を停止して見せる、そして、それをペアでアドバイスしあうというものでした。画像をお互いに見ているので、本人も相手も理解し、適切な評価をしていました。本時の仕上げで、中村先生が動画をとって、見せていました。私がみても、見事に上手になっています。

4時間目：山口先生が社会科で中1で授業をしました。教室にあるテレビとコンピュータを結んで映像で、世界の乾燥帯を中心に理解させようとしていました。また、グラフなども説明のために映像にして示していました。私が興味があったのは、私が、3年前に4年の授業をしたことを、山口先生の授業から思い起こして発言をしていた生徒がいました。社会科も積み上げか、と思ったものです。

私から書くのはばかれますが、上越教育大の先生方は「大変レベルが高く、勉強になりました。あとで、まとめて感想等を送ります」と言って帰りました。レベルが高いというのは、授業がむずかしいというわけではありません。今、日本で考えられている、「発見、気づかせ、考えさせて、身に付けさせる」が、教師と子どもの中で大変うまくなされているということです。教師も子どももレベルが高いという意味になります。

「教えて考える」という授業が成立している授業でした。これは、文部科学省が出している現在の学習指導要領が求めていることです。

